

泌尿器科の患者さんが不安のない日々を過ごせるように

更年期障害、女性だけではなく、男性更年期障害にもご理解を！②

男性更年期障害かも、どんな検査、治療をするの？

文 佐々木裕

text by Hiroshi Sasaki

前回は、男性更年期障害をみんなを理解しようというお話でした。

今回は、実際、男性更年期障害ではどんな検査や治療を行うのか？解説したいと思います。

男性更年期障害を疑い医療機関を受診すると、まず、調査票による問診が行われます。最もよく使用されているのは Aging Male's Symptoms (AMS) スコアと呼ばれる症状調査票です。点数により症状の程度が評価されます。この調査票は、インターネットなどで調べると出てきますので、ご心配な方はぜひ一度、ご自身で行ってみることをお勧めします。

次に、症状、調査票評価などから男性更年期障害を疑う場合は、採血検査が行われます。男性ホルモン値を測定します。2007年版加齢男性性腺機能低下症候群（LOH症候群）診療手引きでは、遊離テストステロン（フリーテストステロン）をメインで測定とされていました。22年の改定では、欧米に沿って、日本においても総テストステロン値によってまず判断することが推奨されました*（遊離テストステロン

の測定でも問題ありません）。

こうしたホルモン採血のポイントは、午前中に測定することです。血中のテストステロン値は夕方になると低くなるので、正しい診断ができない場合があります。可能であれば、午前8時から11時に測定することが推奨されていますので、午前中に受診しましょう。

実際、症状を認め、採血で男性ホルモン値が低い場合は、治療が行われます。まず、食事、運動などの生活習慣指導が行われます。男性更年期障害は、メタボリックシンドロームと密接に関係しているため、食生活の改善はとて重要です。次に、男性ホルモンを補充する治療、テストステロン補充療法（TRT）が検討されます。本邦においては、テストステロンエンタート酸エステルといった薬剤を数週間おきに筋肉注射で投与します。TRTには、いくつかの注意点がありません。まず、前立腺がん患者やPSA高値で前立腺がんを疑う患者さんには投与ができません。また、TRTの副作用として、血液が濃くなる多血症や造精機能障害などがあります。投与の適応、可否について

はよく専門の先生とご相談ください。

最後に、更年期様の症状が、うつ病などの精神疾患や他の疾患から起こる場合もありますのでまずは、受診、相談が重要です。かかりつけ医やお近くの泌尿器科、メンズヘルス外来などでお気軽にご相談してみてください。

* LOH症候群（加齢男性性腺機能低下症）診療の手引き2022年

Profile

医療法人社団 SASAKI CLINIC 理事長
佐々木クリニック泌尿器科 芝大門 院長
慈恵医大 泌尿器科 非常勤講師

1973年生まれ。1999年、慈恵医大卒。虎の門病院、東海大学、トロント大学を経て慈恵医大で長く前立腺がんの研究・診断・治療などを行ってきた。特に腹腔鏡・ロボット支援手術は2000例以上の執刀・指導経験を持つ。また、MRI/US 前立腺融合標的生検の先進医療では、保険適用に尽力した。2022年11月、東京都港区に泌尿器科専門の佐々木クリニック泌尿器科芝大門を開院した。日帰りの前立腺生検や放射線治療前のスパーサー挿入などにも力を入れている。

